

『若き日の友情』

辻邦生、北杜夫著

出版社：新潮社：1800 円

20 歳代前半だった 1948 年から 13 年のあいだに、二人の小説家を取りかわした手紙を集大成したこの書簡集の読みどころは、それぞれに自己を実現していく過程が、おのずから浮かび上がってくることである。

互いに信頼しあって、飾らず隠さず、感じていること考えていることを書き伝える文面には、透明な清々しさがある。どの手紙からも汲みとれる率直さの賜物として、二人が本格的な作家活動を開始するに至るまで（その時期に若干の差はあるが）、自己を形づくってゆく道筋の大事な部分を、読者は迷わずにたどってゆけるにちがいない。

医学部学生だった時代、さらにそれにつづく何年間か、北氏が小説の着想やら執筆やらについて、あれこれめぐらす模索を披瀝する相手として、辻邦生という友を得たのはまたとない幸運だった。辻氏の折々の反応が、かけがえのない励ましになったであろうと推察がつけられる。逆にまた、辻氏にとっても盟友の模索と若き悩みは、大きな刺激となっていたことだろう。

その交流の絆が、トーマス・マンへのいずれ劣らぬ深い傾倒であったのも興味深い。

辻氏の手紙がしばしば、北氏の作品に対する懇切にして冷静な批評になっているのも、この往復書簡の大事な要所である。また、たとえば事実と虚構の関係という問題をめぐって所見を述べつつ、北氏の意見を求めるあたりは、単なる友人を越えた、いわば文学的同伴者への敬愛が感じとれる。

こうした手紙のやりとりが生まれた背景には、辻氏がよく筆にした言葉を借りれば、魂の交流の濃密な空間が存在する。これは若き日の二人の小説家書いた、自己形成小説である。そう考えると、この往復書簡のはじまる以前の交友がどのようなものであったか、新たな関心も湧いてくるし、E メールとやらのきれぎれの文章ではあらわせない、魂の声を交換するような手紙を二人を取りかわした時代が、懐かしく回想される。そういう意味で、ここにはひとつの時代の青春の証言も読みとれるのである。

(日本経済新聞 2010 年 9 月 12 日 (日) 朝刊：22 面より)

△ 後期定期試験一（大学：2/7 で終了、短大：2/3 で終了）

△ 2/15（火）－涅槃会

△ 2/4～3/27 まで一短大（保育 1 年）：保育実習

△ 3/11（金）－修了生発表<大学院生>  
卒業生発表<大学生・短大生>

○ 3/17（木）－卒業式予行

◎ 3/18（金）－卒業式（短大：10:00～・大学：13:00～）

● 図書館用語

「一次資料」－知識、思想、情報などを他の人に伝達するために、紙、写真、磁気テープなどに記録したもので、二次資料に対していう。

科学技術の場合は、学術論文・技術レポートなどをさす。一次文献・一次刊行物・一次情報などということもある。

目録、索引などの二次資料に対することばとして使われるが、研究社が研究するために使用する資料という意味で使われることもある。

－二次資料（一次資料に到達する手がかりとなる資料：文献目録など。）

－三次資料（二次資料を検索する資料：日本書誌の書誌など。）



